

# Tokyo symposium digest

新富山大学 芸術文化学部 創設記念

## 東京シンポジウム

「日本の未来と、地方・芸術文化・教育」

■開催日 平成 17 年 6 月 10 日 (金)

■会場 丸の内 MY PLAZA ホール (明治安田生命ビル 4F)  
東京都千代田区丸の内 2 丁目 1 番 1 号

## 地方の復権を、日本中へ提言

日本の未来は、地方文化の再生にかかっている。

新 富山大学に創設される芸術文化学部は、富山県高岡市にキャンパスをかまえ、今の日本に失われつつある地方の個性豊かな文化を目指しています。

東京シンポジウムは、当学部のビジョンを広く世の中に問うために開催しました。「地方文化の再生」を。あえて日本の中心＝首都東京から訴えたこと、そして教職員及び学生の手作りによる運営は、私たちの強い意気込みの現れです。

おかげさまで、各分野でご活躍のパネリストの方々に、魅力ある日本の再建、伝統を活かす芸術文化の展開のあり方、地方文化拠点の役割、地方からのグローバル化、教育改革の方向性などについて重要なヒントをいただきました。

これから、こうした論議を礎に、自然環境と伝統文化の場、高岡で、日本の未来を担う若者たちの知性と感性を、豊に育む教育を行っていきます。

前田一樹

### 第 1 部 シンポジウム

開会挨拶	西頭徳三	国立大学法人高岡短期大学学長
芸術文化学部紹介	前田一樹	国立大学法人高岡短期大学学長補佐
パネルディスカッション	養老孟司 安川英昭 中村史郎 妹島和代 伊東順二	
謝辞	水嶋和夫	国立大学法人高岡短期大学副学長

### 第 2 部 交流会

■肩書きは、東京シンポジウム開催時のものです



■東京シンポジウム案内状

コーディネーター

伊東 順二  
Ito Junji



富山大学芸術文化学部 教授

長崎県美術館館長／美術評論家

早稲田大学仏文学部大学院修士課程修了後パリに留学。帰国後は、美術評論家、アートプロデューサーとして、展覧会の企画監修、アートフェスティバルのプロデュース、アートコンベンションの審査員、都市計画、また、企業、協議会、政府機関などでの文化事業コンサルタントとして幅広く活躍中。

## 情報の興味は

### 時間や地域を選ばない。

長い間、大都市東京の陰に隠れて、日本の地方都市は文化的に空洞化しているような印象を持たれていた。政治や経済においては中央集権という構造から見ても、そのような傾向が強かったと言えなくもないが、文化的な側面はその二つの分野の影響を受けていた、とも言える。確かに、時代の先端を走る文化、例えばファッションや音楽、映像などは、東京を始めとする大都市圏が主導的な立場を占めているが、それはあくまで、情報の集積は経済や政治の現場に集中するという商業的な理由が大きく、その点においては、現代文化における地方の限界は確かにある、といっても良いだろう。

しかし、忘れがちなことは、日本には長い歴史があり、環境に根ざした個性の強い地域文化が存在しているという事実である。

前進することによりのみ強迫観念的にとらわれていた近代主義を背景とした高度経済成長期においては、地域の文化を振り返ることは少なくとも、日本社会が文化的に熟成し、受信型から発信型に、社会が変貌しようとしている今は、地域の歴史性こそが発信のコンテンツとなり、そして、現代的な方法論と視点で、その形を再生することが各地域に求められるようになる。つまり、世界→東京→地方という



構図から、地方→東京→世界というふうに文化発信の構造が逆転しつつあるのが現在の状況である。

それは社会の文化的成熟という理由の他に、ブロードバンドネットワークの整備という新しい要因によるところも強くある。

つまり、ブロードバンドコミュニケーションによる興味の範囲の拡大と情報需要の飛躍的な増大である。

ある意味で、世界はこの新しい情報システムを使って人類の歴史全体を検証している、と思えるほど、情報の興味は時間や地域を選ばない。発信できる情報が大きければ大きいほど、情報の集積が起これり、また、受信の機会も増えることになる。今や、日本全国がフリーアクセス状態に向かっていくことになるだろう。

結果、地方だけが変わるのではなく。東京も文化における立場を変化させていかなければならなくなる。

富山、北陸は我が国の文化において最も日本的な部分を背負っている。その重要性は、万葉集だけでなく、時代をえらばぬほどである。また、環境や景観においても、日本という原風景がここにある、といっても過言ではない。しかも、富山は良港に恵まれている上に、経済の中核になるような企業も集中している。

今後、この地域においてどのようにその歴史性を現代化し、発信していくか、ということは日本文化の将来に関わることさえ言えるような背景が揃っているのである。その地に生まれる芸術文化学部の役割は非常に重要と言わざるを得ない。

東京フォーラムは東京と地方の役割の変化に対する確認、また、地方に期待される発信という新しい機能の確認のために企画したイベントだった。

伊東 順二



パネリスト

## 養老孟司 Yoro Takeshi



解剖学者 東京大学名誉教授

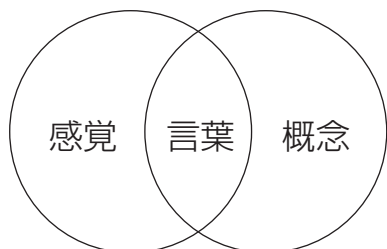
東京大学医学部卒。大ベストセラーとなった「バカの壁」など著書多数。「個性」は脳ではなく生まれつきの身体にある」と述べるなど、常に革新的な視点で、社会、文化、人間など幅広い分野を“解剖”し続ける。

### 感性に潜む

#### “違う世界”と“同じ世界”

感性というのは日本独自の言葉で英語に同じ意味を表す言葉はないのですが、感性は“感覚”と“概念”の2つの世界に分かれていると私は考えております。

感覚の世界にはどういう特徴があるかというところ、全てのものが皆違っているという考え方が前提にあることです。たとえば「りんごが100個ある」と言ったときに、感覚の世界では1個1個のりんごは全て違うことを示唆しています。色が違う、大きさが違う、置いてある場所が違う、味が違う……といったように。ところが、これを概念の世界に持ち込むと、なんと“りんご”は“りんご”という1個の言葉でしかなくなってしまいます。



感覚の世界では、多種多様の“違う”りんごがあるが、概念の世界では“単一”のりんごでしかない。換言すれば、感覚は“違う世界”であり、概念は“同じ世界”なのです。

感覚が示す“違う世界”と、概念が示す“同じ世界”。それを皆さんは、反対語だとおっしゃるけれど、私はそうは思っていない。この両者は相補的で、お互いに頼りあっていて、互いに両者を重ねているものが言葉だと思うのです。

実際には1つとして同じ物体など世の中にはないのに、単語として“りんご”と聞いたとき、皆さんは“同じもの”だと思ってしまう。ところが、ここにいる皆さんに“りんご”と書いていただくと、全員が違う“字”をお書きになるんです。大きさも形も違うのです。皆さんの頭の中にはどこかに正しい“りんご”という字がそれぞれ存在するという前提があるのですが、皆さんが頭に描く“りんご”のイメージは全部違うものであるはずなんです。

### 感覚と概念の両面から

#### ものごとを見ないと、錯覚に陥る。

さて、地方、地方と言葉では言いますが、感性の世界から言えば、地方もいろいろです。高岡短大、富山大学も富山県に存在し、富山県も東京から見れば地方です。しかし、私にとって“地方”は、父親の出身地である福井県ですし、私自身が育った鎌倉という地方もある。もうお分かりでしょう。地方という単語は、人それぞれ“違う世界”を持っているのです。逆に“中央”という単語は比較的誰にも“同じ世界”になりやすい。しかし、地方という言葉とて実は中央的な言葉なのです。つまり、“地方”という言葉が人によってさまざまにイメージされるのは、“中央”という単語に対して“中央以外のエリア”としてくくられるいろいろな違う場所を全部一緒にして“地方”と表現するからなのです。1つの中央があって、それに対する複数の地域をまとめて地方とする。当然中央以外のどこを地方だと定義するかは、人によってまちまちです。

今、私が一番問題だと思うのは、特に日本においてですが、この“違う”という世界、考え方が消えつつあることです。言葉にとらわれて、本質的に異なるものを“同じもの”だと錯覚してしまう。「地方の復権」などよく言われますが、そう言った瞬間に中央的な視点になっている。問題を感じているのは、個々に異なる地域にフォーカスしてのことであるはずなのに、ありとあらゆる違う地域の問題を、「地方の問題、復権」という言葉でくくってしまっているのです。

ですから、「地方の問題、復権」について議論するのは意義があることなのですが、議論のうえで「地方＝一般論」になってしまうので、聞いている側はよく分からなくなってしまうのではないのでしょうか。

中央と地方を議論する際に、ついつい地方がひとまとめに語られがちです。同様に、社会における人間はどうあるべきかを語る際にも、しばしば間違ったところに視点が置かれがちであることを私は指摘したいと思います。

パネリスト

安川英昭  
Yasukawa Hideaki



セイコーエプソン株式会社 取締役相談役（前会長）  
社団法人 長野県経営者協議会会長

東京大学工学部卒業、世界市場をリードする技術、商品開発にくわえ、芸術、教育、環境をテーマにした先駆的な社会貢献活動が、国際的に高く評価されている。

## 危機的な日本に 求められる人材とは

私は海外の工場やR&Dの施設を見て、日本に対する非常な危機感を感じております。国際競争力の低下や少子高齢化。そして、学力の低下と心の軸の弱体化。ことに志であるとか使命感が失われてきていることを非常に危惧しています。危機的な日本に求められる人材には、次のような能力が必要と考えています。

第一がコミュニケーション能力。私どもの会社では、十数年前から、大卒の新入社員は1年間、製造の現場、販売の現場に実習に出し苦労されている人の下で勉強してもらうことになっているのですが、1年経って本社に帰ってくると、「自分の言葉がいかに通じないか分かった」と言います。社会人になっても、学生の仲間同士で使う言葉で誰とでもしゃべっていますから通用しなかったのです。それから、専門用語。大卒の人でも分かったつもりで使っていて、実は分かっていないということが多いです。だいたい50%はそうです。私は、専門用語を使わずに普通の言葉で相手に分かってもらえる人間になってほしいと考えています。

辛抱強さ、粘り強さも大切です。実はこの辛抱強さ、粘り強さという話を、ある工科短大でしたのですが、質問のときに学生が「辛抱強く、粘り強くやるといい発明はできないと（先生に）言われたけど」と言うのです。とんでもない話です。そんなことを言う先生もおかしいと思います。私は「エジソンだってとんでもない努力をした。彼の成功は、わずかなひらめきとあとの99%はものすごい努力だ」と答えました。エジソン自身もそう言っています。そういう話を、その学生の先生はしていなかったのでしょうか。本当に教育というのはどうなっているのかと、私は心配しています。

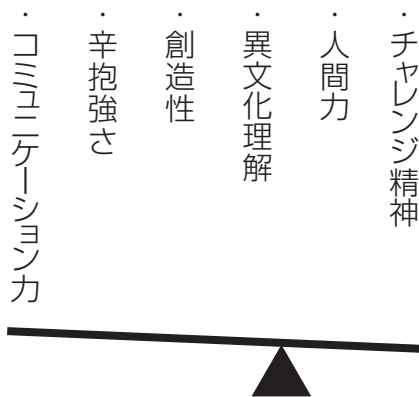
それから創造性。創造とは、ぼやっとしていて、ある日頭に浮かぶということは有り得ないのです。一生懸命努力している中から、ヒントが出てくるのです。

異文化を理解する心。これは、学生時代はもとより社会に出ればこれから益々世界を相手に活躍していくわけで必ず求められる能力です。それなのに、日本では歴史をきちんと教えていないのです。海外の人々からいろいろ日本の歴史のことを聞かれても分からない日本人が多くなっています。そうすると「なんだ、自分の国の歴史も分からないのか」ということで軽蔑されるケースが非常に多くなります。

学問の成績だけでなく、文武の能力をバランスよく保った人間が求められています。このバランスというのは、低いバランスではなく、高い次元で保たれることを指標とすべきです。

そして、人間力の向上。結局、人間力を養うような家庭教育や、特に小学校から中学校にかけての学校教育が不足しているために、学力にしても中途半端になっている気がします。そんな状態で、やがて国際社会に出て行ってもらっては困るのです。学生のうちにしっかりと人間力を養っておかなければなりません。

最後にチャレンジ精神。これにはスポーツがいいと思います。ある商業高校は、「おいっちに、おいっちにの学校」と呼ばれていて、通信簿の評価点が1と2の成績しかないレベルの学校なんです。毎日裏山を1時間走らせるということをやりました。汗びっしょりになって、着替えて勉強させる。そういうことをやらせて非常に成果を上げているということです。そういった体を使って、体で覚える教育から段階的に教育していくことが、私の経験からいっていいのではと、そんなことを考えております。





パネリスト

## 中村史郎 Nakamura Shiro



日産自動車株式会社 常務デザイン本部長

いすゞ自動車を経て、1999 年日産自動車のカルロス・ゴーンに招聘され、ブランドデザイン力の向上を達成。企業活動全般におけるブランド・ビジュアル・アイデンティティ・マネジメントを推進している。

### 自動車産業を、日本全体を飲み込む、 グローバル化の波。

ヨーロッパを見ても昔はブランドだとか、それに携わるデザイナーというものは国内で活動をしていました。それが今やブランドや製品は国境を越え、デザイナーの国籍も多岐にわたっています。アメリカ人がドイツのメーカーの製品を手がけていたり、イギリス人がスウェーデンのメーカーの製品に関与していたりと、そういったことが現在世界中で起こっています。

こうなってくると求められるのは国籍でも育った土地が培った文化でもなく、ブランドアイデンティティということになります。ここ20年ぐらいであっという間にデザインの世界もグローバル化が進んでこのようになったと言えます。

日産の場合ですが、私が移籍したのはちょうどNRP（日産リバイバルプラン）という3カ年事業計画が策定された時期です。同じ時期にエグゼクティブクラスに外国人が多数移籍してきました。そこで、日産とはどういう会社なのか、日本という国はどのような国なのか、自ずと問い直すことが必要となりました。これは私だけでなく、以前から日産で働いていた社員も同じだったと思います。そしてこれは日産自動車だけでなく、今日のテーマである『日本の将来はどうあるべきか』だとか『地方、あるいは日本からどう情報発信していくのか』ということとまったく同じではないかと私は考えます。クルマのデザインだけでなく、あらゆる人にとって、環境がグローバル化されていくなかで自ら問わなければいけない課題だと思います。

### 日本固有の価値観を、 世界が受け入れる時代に。

日産自動車のコンパクトカーcube（キューブ）は、いわゆる“箱”の格好をしているクルマです。しかも、左右が非対称です。こうしたクルマは、乗用車のジャンルでは世界中に cube しかありません。そしてこのクルマ、箱のよう

な形で、走っていても止まっているように見える。世界で最も遅く見えるクルマといってもいいでしょう。何でこのようなデザインにしたかというとお客様にゆっくり走る心地良さを提供したかったからなのです。

ユーザー調査をすると団塊の世代が速いクルマを志向する一方、団塊ジュニアの世代ではゆっくりしたクルマがいいという結果が出ました。この感覚は当初私は正直なところ理解できなかったのですが、今はゆっくり走ることの心地良さの大事さを感じます。

この日本でしか販売していない cube を海外に持って行って見せるとものすごい反応です。cube の“ゆっくりが快適”というコンセプトは、世界に通ずる価値観ではないかと思っています。また、通常クルマは外側のデザインから始めるのですが、cube は内側から行いました。人間を中心に内側から外へ発想を広げていきました。日本の建築の考え方も内から外です。ドライバーは右側に座るのだし、クルマの形状が左右同じでなくても何もおかしくはない、むしろ違うほうが理にかなっている、つまり内側の快適をまず最初に考えたわけです。

日本の昔の乗り物といえば、ゆっくりとした歩調が特徴である牛を使った牛車が代表的です。西洋では俊足の象徴である馬を使った馬車が昔の乗り物の代表例。もともと日本人は“ゆっくり”が好きなんです。その日本の価値観が、今の世代になってやっと世界で受け入れられつつあると私は思っています。

グローバル化ということで経済は国境を越えてしまいましたが、文化には地域の個性や国境を残してほしいと思うからです。



パネリスト

## 妹島和世 Sejima Kazuyo

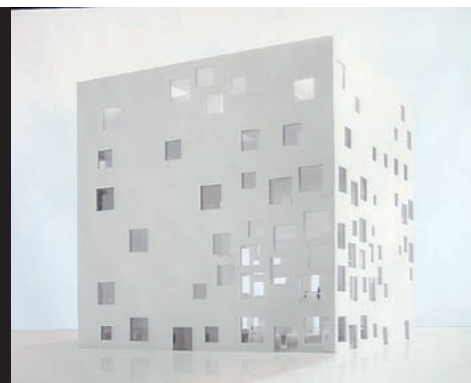


建築家 慶応義塾大学教授

日本女子大学大学院修了。2004年ベネチアビエンナーレ国際建築展で金獅子賞を受賞した。“21世紀美術館”をはじめ、オリジナリティある斬新な作風で建築界に衝撃を与える。現在、欧州、米国で新プロジェクトが進行中。

### 変わる建築のプロセスと コラボレーション。

私が経験している範囲で感じていることは、建築の分野では今、コミュニケーションが非常に大切になってきているということです。というのは、建築というお仕事における“何かを構想する”、“情報を収集する”といった作業が、1人ではこなしきれない規模になってきているからです。最近の建築というお仕事は、いろいろな専門分野の人がプロジェクトごとに各国から集まりまして、クライアントやユーザーと一緒に、どういうことができるか試行錯誤するところからスタートしています。



海外へフィールドを広げるに従い互いに理解すると言いますか、設計以前の部分から勉強しあわなくてはならないことが多くなってまいりました。そして、経験を重ねるうちに私のように小さな事務所でやっている建築家も、チャンス次第で突然どこかの国から呼ば

れ、さまざまなプロジェクトに参加できるケースが結構あるものと知りました。しかも、そのようにさまざまな仲間が集まることで、個々が持っている能力を組み合わせ、個人で取り組む場合とは違った仕事をすることができることも少なくありません。

建築というのはものすごく時間がかかる仕事なのですが、今の現代的な文化と逆行して、ゆっくり考えながら進めていくところもあり、建物が出来上がったところにはスタート時とは違った流行が生まれていたりすることも少なくありません。でも、そういった時代の流れと作業の流れの中でさまざまな国のさまざまな技術や文化をもった人々が入り、議論しあう、皆で考えながらいろいろなことが進んでいくプロセスで、最終的に建築物がどんどん面白い

ものになっているのだと思います。

ドイツ、エッセンにある“ツォルフェライン炭鉱の産業建造物群”は、バウハウス様式の建造物が高く評価される産業遺産で、操業終了後は州に買い上げられ、改修を経て90年代からは、デザイン、芸術、文化などの関連企業が建物群に入居、観光ツアーや娯楽施設が完備されています。

そこに『ツォルフェラインスクール』を建設するこのプロジェクトは、もともと存在する世界遺産を保存するだけではなく、新しい施設を合わせたものが新たな世界遺産に指定されることになっているところが面白いところです。

このプロジェクトで私たちはすべてを担当するわけではなく、その一部のデザインスクールの建築に携わる予定です。建物は5階建てになる予定で、周りが炭鉱だということもあり、当初マッシブなコンクリートの建物を建てようとしていました。しかし、コンペで私たち日本人が勝ったこともあり、「とにかく透明なものがいいんだ」と言われまして、試行錯誤の結果、最終的にコンクリートになるべく薄く採用することにより、壁は壁でも透明度の高い建物にするということでした承をいただきました。

いくつか私が関わっている建築のお仕事について説明してきました。いろいろな所でその都度、内装や外装に工夫を凝らしながら設計することが、面白かったり大変だったりします。それぞれの場所によって気候風土、振舞い方の違いというものがあって、それらが建築に大きく関与しますから。

高岡のある北陸も、美術館を建てるお仕事で金沢には何度か訪れました。単に設計のためだけに訪れたに過ぎないのですが、私がその地で感じたり思ったことは、その仕事のみならず、次の仕事、さらにその次の仕事へと脈々と受け継がれています。そして、さらに仲間を通じて大きな仕事へと広がっていくのだと思います。

● 本稿は、<http://www.geibun.jp/artabe/> より抜粋（一部加筆修正）



学長開会挨拶



第1部 シンポジウム

## 東京シンポジウム総括

20世紀が科学技術の時代だとすると、今世紀は芸術と文化の時代と言われている。科学技術の発達は、私たちの生活に利便性と物質的な豊かさをもたらした。その反面、地球温暖化をはじめとした環境破壊、人心の荒廃による悲惨な事件、拝金主義の結果が招いた様々な経済事件等、あらゆるジャンルに前世紀の矛盾が湧出している。

今日の社会状況において、人間生活の真の豊かさとは、新しい価値観を持った社会にパラダイム・シフトするためには、どのような人材が必要なのかという命題を抱えて、芸術文化学部は誕生した。

創設に先立ち、4人の有識者を招いて、高岡という地方都市に総合大学の一学部として芸術文化学部を、創設する意義を伺った。解剖学者で東京大学名誉教授の養老

孟司氏には、21世紀における芸術の役割、日産自動車常務デザイン本部長の中村司郎氏と、金沢21世紀美術館の設計者で、世界的に活躍する女流建築家の妹島和世氏には、グローバル化と地域固有文化との関係、グローバル企業の経営者、セイコーエプソン取締役相談役の安川英明氏には、今後、企業が必要とする人材について語っていただいた。

養老氏は、芸術というのは、それぞれの個性に基づく身体感覚の世界と、言語のように共通認識を基盤とした概念の世界を、行き来し両者を結ぶものであるとし、都会では概念の世界が優先されているため、自然豊かな地方で芸術教育をおこなう優位性について述べた。

日産自動車のデザインチームを率いてきた中村氏は芸術は自分の世界を表現するもので、使い手の生活を豊かにすることを目指してきたデザインの世界と違うと



会場の1階に設置されたサイン

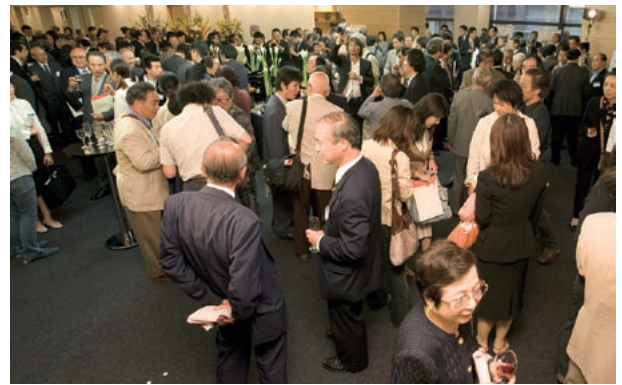


高岡短期大学の学生も駆けつけて準備を行った





第1部 パネルディスカッション



第2部 交流会

考えてきたが、最近ではひとに喜ばれるものを創るのがアートというふうに変化してきている。両者の境界が曖昧になり、人に対してメッセージを送るという点においては、アートもデザインも同じであることを強調した。続いて、日産の人気車キューブのデザインは走っていても、止まっているように見えるという、車は速く走るといふ従来の価値観の転換から生まれたことを例にあげ、グローバル化する社会の中で、地域の独自性や美意識を大切にしたいと注文をつけた。

世界中でプロジェクトを遂行中の妹島氏は、作品を紹介しながら、各地の風土や文化の違い、様々な人々とのコラボレーションの結果、自分の作品が変わってきたと語りつつ、各地域の固有の価値を認めてゆくことの大切さを指摘した。

長年、企業経営の中で、人材教育に取り組んできた安

川氏は、学力だけでなく豊かな感性や礼節を兼ね備えたトータルな意味で、人間力を向上させることが、国際化してゆく日本にとって重要であり、日本人の精神面の弱体化、学力の低下からくる国際競争力の低下という不安材料を挙げた。

4氏の提言をうけ、芸術文化学部が輩出しようとしている人材が、これからの社会に必要な人材であること、地方都市における総合大学の一学部として存在価値があることを確信した。

今後、総合大学のメリットを生かして、学部横断的な研究、高岡という地を舞台に具体的なプロジェクトの推進を通して、地方から世界に向けて発信できる学部に育ててゆきたい。

貴志雅樹



東京シンポジウムの様子は新学部創設の特別番組でも紹介された



教職員はもとより短大卒業生や高岡市の関係者も加わって運営を行った